億々無量網にかゝりあがるや、濱へひきあげ人々立寄りうちころしたり、其鼠の殘りどもことごとく陸へあがり、南部佐竹領まで逃ちりて、あるひは苗代をあらし、竹の根を喰ひ、あるひは草木の根を堀起し、在家へ入りて、一夜のうちに五こくをそこばく費す事際限なかりし、山中へ入たる鼠ども毒草こそありつらめ、一所に五百三百づゝいやがうへにかさなりて死てありしとかや、

近頃下總のシンカイといふ處にても、獵師の網に鼠かゝり、網を損せしといふ、船子のいふに、島わたりの鼠ともいふ、寛政三辛亥年、美濃國大垣に鼠つきて、五穀を損せしといふ、戸田采女正殿領分なり、

〔半日閑話四〕一鼠喰田畑

寛政三年亥夏、美濃國大垣領に鼠多く出て、田畑を喰ふ虛實未分明

〔蕙樓閑話下〕鼠咋衣領

俗ニイフ、鼠人ノ衣領ヲ咋ヘバ福有リ、初學記ニ百怪書ヲ引テ云ク、鼠咋人衣領有福至吉、又武備志ニ云ク、鼠咬將軍服襖有喜、然レバ華人モイフコトナリ、魏志ニ、公子蒼舒云、鼠嚙衣不吉、コレマタ百怪書武備志ト相反ス、

〔古事記上〕御祖命告子〇大穴牟遲神云、可參向須佐能男命所坐之根堅洲國、必其大神議也、故隨詔命而參到須佐之男命之御所者、其女須勢理毘賣出見爲目合而相婚、還入白其父言、甚麗神來、爾其大神出見而告、此者謂之葦原色許男、即喚入而令寢其蛇室、〇略中亦鳴鏑射入大野之中、令採其矢、故入其野時、即以火廻燒其野、於是不知所出之間、鼠來云、內者富良富良、此四字以音外者須夫須夫、此四字以音如此言故、踏其處者落隱入之間、火者燒過、爾其鼠咋持其鳴鏑出來而奉也、其矢羽者、其鼠子等皆喫也、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年十二月癸卯、天皇遷都難波長柄豐碕、老人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難